

記念講演

原爆・原発 子どもらは今



詩人・随筆家

アーサー・ビナード さん



天気があまりによく、自転車で来ました。池袋から254号線を走って、志木街道を曲がって、もうそろそろかなと思っていたら、無料回収ののぼり旗に目を奪われて、公民館に気付かずに通り過ぎ、清瀬の手前まで行ってしまいました。

今日の会場はムシムシしてみなさんは暑いでしょうが、主催者が空調を入れたい

と言ったんですが、私は東京電力に協力したくないので、窓を開けて空調を使わないことにしました。暑いのはぼくのせいです。



ヒロシマ・ナガサキの原爆体験

ヒロシマとナガサキで原爆を体験した方々の話を20年間聞いて、いろんな人たちと出会ってきました。

被爆した人たちが、放射能の影響が分からないまま不安を抱え、それがガンや他の病気の形であらわれたりする。いつどんな形であられるか怯えるような気持ちを抱えて生きています。被爆者の治療に当たっている肥田舜太郎先生は、開き直って自分は大変なものを抱えているけれど、それに負けない力をつけて向き合って生きていくという。

そのとおりですが、3歳の子どもに開き直れと言えるか、ずっと24時間、365日開き直ったまま強く生きていけるものではない。みんなたいへんなものを抱えて生きている。被爆者を名乗ることは注目される場合もあるがレッテルを貼られることになり、どうやって被爆体験と向き合えばいいか、身体的な思いと社会的な思いと両方付き合っていくしかないんですね。



第五福竜丸の被爆体験

1954年の3月1日、ビキニ環礁でぼくの母国の国防総省が行った水爆実験で、死の灰を浴びた第五福竜丸の乗組員が被曝しました。マーシャル諸島の住民も他の船の乗組員も米軍の関係者も被曝しました。彼らの場合は放射性物質の死の灰を浴びせられて被曝しているんですね。「ヒバク」という文字を区別するのもばかばかしいことですが、広島原爆で遭遇した人たちが「被

爆」で、第五福竜丸の乗組員は「被曝」と、放射性物質を書き分けているんですね。福島原爆のメルトダウン・メルトアウトによる被曝も「日」篇による被曝ですね。

もちろん広島原爆の被爆者は放射性物質の死の灰も浴びて、食べ物から身体内部に取り込んでいるし、原爆に直接あった人たちは、一瞬にして爆発の大量の放射線を浴びているので、「被曝」であっても「被曝」であっても、被爆者として差別を受け、肉体的な重荷を背負っています。

第五福竜丸の乗組員の話がたくさん聞いて絵本を作ったのですが、乗組員の話も聞いても、関係のない人にとっては遠い出来事で、本当の意味での被曝を受け止めているのではない。日本のどういう時代を生きて、その頃、何が永田町で起きていたか、何が焼津^{やいず}で起きていたか、ということも調べていくと、関係のない人の姿が見えてきたんです。被爆者以外の、もしかしたらここに集まっているみなさんの中には、自分は直接関係ないと思っている人がいるかもしれない。でも関係ない人とはどういう人なのでしょうか。

核兵器は最初、アメリカの陸軍省がマンハッタン・プロジェクトという秘密の国家プロジェクト、憲法違反のプロジェクトを立ち上げて、何年もかけてウラン爆弾とプルトニウム爆弾を作り、一発のプルトニウ

ム爆弾をアリゾナ州の実験で爆発させました。それから広島にウラン爆弾、長崎にプルトニウム爆弾を落として、そこからさらに開発の流れが加速するのです。

第五福竜丸が遭遇した水爆実験も含め、アメリカ一国だけでも1000回以上の核実験をやっています。もちろんソ連も中国もフランスもイギリスも核実験をやっています。核実験をやった核保有国がどんどん今も増えつつあります。その中で2000回以上の核実験が行われて、死の灰が地球上のあらゆるところで降り、平和利用の名の下で、死の灰が大量に生み出され、世界各国の放射能汚染の問題が深刻化の一途をたどっているのです。



被曝していない人はいない

関係ない人はいなくなっているんですね。被曝していない人間はこの地球上に一人もいなくて、人間だけでなく被曝していない生き物・物体すら無いんですね。関係ない人はとっくにいなくなっているんですが、自分は直接関係ないと思い込んでいる人、あるいはマスコミなどに騙されて、遠い出来事だと勘違いしている人たちがいる。

いま関係ある人と無い人を振り分けても全く意味がありません。100%みんな関係があるんです。関係ある人しかこの地球上にいないから、自分たちが直接関係があ

るということをちゃんと認識している人と、関係ないと勘違いしている人がいるということです。

どのくらい勘違いしている人が多いかで国の方向性も決まってくるんですね。イタリアのベルルスコーニ首相が「原発事故の前に原発と手を切りますか」という国民投票をやり、94.7%の人がイエスと答えました。5.3%の人が核をやりたいと言ったんですね。

国民投票はもちろん原爆・原発を問うものだったんですが、同時に国民の知能テストというか、IQを測るテストなんですね。イタリアはすごいですね。95%近い人が頭イイということが分かったんですね。つまり勘違いしている人が少ないということなんです。ドイツの国民も勘違いしている人が比較的少ないと思うんですね。選挙の結果を見ても、今のドイツのメルケル政権を見るとわかっている人が多いんですね。



“勘違い・関係ない”人口を増やす

日本はどのくらい“勘違い・関係ない”人口を減らしていく教育ができるかということが、これからの課題だと思います。残念なことに日本の政府・経団連などの経済団体は勘違い人口を増やそうとしています。

1954年の原発予算を組んだ頃のPR作戦と、マスコミの原発売り込み大作戦で、

勘違い人口をずっと増やし続けています。大手マスコミは“勘違い・関係ない”人口の増殖炉といっても過言ではないですね。いまその増殖炉がメルトダウンして頑張っている新聞もあるんですが、テレビは全く情報源として役に立たない。

勘違い人口がこれからどうなるか。ぼくらの現実を直視して、置かれている立場を認識する、そういう運動が勝つのか、それとも勘違い・関係ない人口を増やす運動が勝つのか、そういう岐路に立っている気がします。



1954年と同じ時代

いまぼくらがいるこの時代、この立っている岐路が1954年の第5福竜丸事件が起きた直後の岐路と似ている気がします。第5福竜丸の乗組員の一人の大石又七さんと、電話で話したんですが、大石さんは第5福竜丸の乗組員として、また被曝者として、日本が最初に原発予算を組んで、核に手を染める時代を生きた人ですね。今年の3月6日丸木美術館で対談した時、大石さんが今起きていることを予言して、私たちはみんな被曝と隣り合わせの生活をしている、みんなが被曝者になる日がいつきてもおかしくない、第5福竜丸に乗り込んだ状態で生活をしているという話をしたんです。

大石さんと話していて、私たちはまた

1954年の時代がめぐってきたと言ったんです。いまどういう道を進むのか、核と手を切ることができるのか、それともまた同じ袋小路に入るのか、それが問われていると思います。ぼくらが生き残れる道を選ぶためには、1954年の時にどういうPR作戦にひっかかって、どういう形で騙されて「平和利用」が進められたのか、それをもう一度ちゃんと見ないと、次のペテンにひっかかる可能性があるんですね。その歴史をたどりながら話をしたいと思います。



原水爆への道

1954年の水爆実験は、一発の水爆でしたが、爆発力はヒロシマ型原爆の1000倍だったんですね。ヒロシマの原爆から僅か9年でその爆発力になったのか、どういう核開発の流れなのか、それをちゃんと見ないと、1954年のことがはっきり見えてこないのです、まずマンハッタン・プロジェクトのことから入りたいと思います。

ニューヨークシティのいちばん人が密集して中心になる島の名前ですね。アメリカ先住民が付けた地名です。マンハッタンにはウォール街があるし、核ビジネスでガッポリ儲けてきた企業の本社があるので、マンハッタンに責任がないわけではないのだけど、このマンハッタン・プロジェクトという名前は、秘密の国家プロジェクトと

して、バレてもわからないような名前をつけたんですね。

アメリカ国民には一切中身を知らせないし、どのくらいの予算を使っているかということも極秘にしている、マンハッタン・プロジェクトそのものがすべて1から100まで全部憲法違反、アメリカの憲法がつぶされてまったく機能しないミイラのような状態になったのは、マンハッタン・プロジェクトから始まった憲法つぶしなんですね。

アメリカの建国の父たち、ワシントン、ジェファソン、アダムスたちは、独裁政権がどういう手口で国民をだまし、国民の富を吸い取って暴走するかということをよくわかっていて、それを阻止するために歯止めになるような憲法を作ったんですよ。

その憲法には税金の使い道について細かく書いてあるんです。しかも偶然に日本の憲法は9条が大事な要かぎめになっていますが、アメリカの憲法もセクション・ナインには、お金の使い道について細かく書いてあるんです。税金を国庫から引き出して使う場合は、必ず法的根拠を作らなければいけないんですよ。予算案を議会で通して合法にしなければいけない。使ったお金の明細と使い道を細かく記したものと、領収書を付けて公表しなければいけない。使った公金はすべて速やかに公表しなさいと明示

しているのです。

マンハッタン・プロジェクト

マンハッタン・プロジェクトは何だったかということ、陸軍の管轄下でなんでも使えてそれを隠して予算案には盛り込まない、国民には一切知らせない、国民の富をガッポガッポ使って核兵器を作る。どういう施設があるか、危険な放射性物質がどう扱われて、どこに飛散しているか全部隠している。今の円に換算すると、計算が間違っていなければ数10兆円ということですね。昔のドルはいまと違って価値があって金と交換できたんですよ。

憲法違反のプロジェクトで何を作ったかということ、2種類の原子爆弾ですね。

濃縮ウランと劣化ウラン

ヒロシマに投下された爆弾にはウラン235と238があります。このウラン235は、地球上にある核分裂する物質です。オーストラリアやカナダ、カザフスタンでウラン鉱山を掘り出すと、何が出てくるかというとウラン鉱石です。ウラン鉱石はそのまま爆弾にできるものではなく、殆んどウラン鉱石238です。ウラン鉱石は危険な放射性物質ですが爆弾になるものではない。これは核分裂を起こして爆弾になるし、原発の中で爆発する。これを工場で濃縮する。

ウラン濃縮ということを知ったことがあると思います。この屑の238を減らして235を増やす、これが濃縮です。235が半になると、今度は核兵器・核燃料として使えるものになる。この238の屑を劣化ウランと言います。

劣化ウランは核のゴミ、原発をやるために濃縮してできたウランから出た屑ですが、放射性物質で危険だし、本当はこの屑をどこかに保管しなければいけない。するとお金がかかる、金もうけの暴利をむさぼるためにやることだから、いろいろなことを考えるんです。ゴミを鉄砲の弾に作りかえて米軍に高く売ればいいと劣化ウラン弾を作って、米軍はイラクなどで撃ちまくるんです。そうすると核のゴミの処理ができる。イラクで使えばイラクの人たちが被爆する、撃ちこんだ人たちも被爆するんですが、それは大丈夫と米軍が言って誰も責任を取らない。一石二鳥、三鳥の儲けが出る。



ウランから作るプルトニウム

濃縮のウランがマンハッタン・プロジェクトの開発のもとで行われましたが、ウラン235よりもっと威力のあるすさまじい物質があるんです。プルトニウムといって、本来地球上にない人工的に作ったものです。

1940年にカリフォルニア大学で作ったのですが、一番効率のいい製法はウランか

ら作るんです。人工的に作らないとこの地球上にない（地球上にあつたらぼくらは生物として進化できなかったかもしれない）。

プルトニウムは、どう作るかというと、ウランは核分裂をします。ここにウランの原子があります。これに中性子をあてます。するとパカッと割れて中性子が2つ出る。ここにウラン235があると、当たってこれも割れて2つ出る。それが連鎖反応というもので、ネズミ算式の核分裂の連鎖反応が起きて、爆発という現象を引き起こす。

ウランの不安定でいつでも爆発する235は、分裂するともっと危険な放射性物質に変わる。核分裂生成物といって、セシウム137、134、ストロンチウム90、放射性元素とか、いっぱいウランの核分裂から出てウランではなくなってしまいます。しかしウランが核分裂しただけではプルトニウムはできないんです。

プルトニウムを作るためにはウラン238を混ぜるんです。混ぜるといっても最初から入っていて、むしろ238が多く入っているんですが、濃縮して核分裂をすると混ぜている238が分裂しない。235が分裂するんです。中性子をいっぱい出します。中性子が他の235に当たってどんどん核分裂していく。238は出てきた中性子を1つ貰ってプルトニウム239に変わる。ウランを核分裂させて238が混ぜていると、

ここでより恐ろしい核分裂性物質のプルトニウムが生まれる。作り方はいろいろあるけど、基本的にはそうやってウランの核分裂でプルトニウムをつくります。

プルトニウムからつくる原水爆

プルトニウムを作るともっとすごい原爆ができます。水爆もプルトニウムから始まります。プルトニウムが爆発して核融合につながるんですね。マンハッタン・プロジェクトから始まった核兵器作りは、ある意味ではプルトニウムづくりが基本なんです。広島に落とした原爆はウランからできました。長崎に落とした原爆はプルトニウムです。ウラン爆弾は広島に落とされた一発だけで終わりました。核実験もしなかったんです。広島に投下した最初で最後です。プルトニウムのほうが大量破壊兵器として将来性があるということで決めました。

広島原爆がプルトニウムを作ったんですね。ウランのヒロシマ型の原爆が爆発すると、プルトニウムが作られる。だけど原爆でプルトニウムが作られると飛び散ってしまう、セシウムやストロンチウムの死の灰と一緒に。爆発のキノコ雲で岩手県まで飛んでしまう。黒い雨で散ってしまうんですね。そのプルトニウムを集めて核兵器はできない。だけど原爆の現象が必要なんです。核分裂をして作らないとプルトニウ

ムはできない。どうするかというと、原爆を造る器でやる。それが核開発の一つの大きな課題ですね。



『未来のパスポート』と原子力の歴史

ぼくがずっとしゃべっていると、みなさんの中には、アーサーは昔から核と手を切るべきだと言っているし本も書いている。意見が片寄っていると思う人もいるかもしれませんね。そう思われると嫌なので、もう少し客観的な原子力の歴史をみなさんに紹介して、それを踏まえてお話ししたいと思います。

この歴史のまとめは『未来のパスポート』という本の中に入っています。その発行元は東京電力株式会社原子力計画部なんです。1997年の1月に出されたもので、定価はどこにも書かれてないので、子どもたちにただで大量に配ったらしいですね。子どもたちに電力のことを紹介するふりをして、実は原発を売り込んでいるんですよ。

最初は火力と水力発電所が出てくるんですが、それと一緒に原発の説明があり、福島第2の写真が載っています。さらに圧力容器の断面図がある。扉の頁には「不思議なパワー原子力」と、可愛いキャラクターがガッツポーズをしていて、次の頁をめくると、最後まで原発がいかに素晴らしいかという売り込みの漫画入りの頁が続くん

ですよ。

「エネルギーのピース・原子力発電、火力も水力もかなわないすごい力を持っている」と、ウラン235と238の話もあるんですね。「炎もないのに燃え出す原子力の不思議」、これは235の分裂、おとなしいウラン238はプルトニウムに変身、可愛い子が忍者のように変身している。

原子力発電所の頁では「自分でコントロール、賢い原子力発電所」、暑くなったら自分で冷やしてくれるし「放射性物質を閉じ込める原子力発電所の5つの壁」、2011年の改訂版では、“5つのざる”としなければいけませんね。「縮んだって平気だよ」とこれはいいですね。あ然とする嘘っぱちがずっと続いているんです。

中でもいちばんすごいのは、原子力の歴史を紹介している頁ですね。ここに出てくるのは、レントゲンとかキュリー夫人とか、アインシュタインはイラストで好々爺っぽく描かれていますね。アインシュタインが第五福竜丸事件を受けて、核廃絶宣言を出す前の写真らしいです。

キュリー夫妻と一緒に研究しているんですが、これは明らかに大量被曝する前の姿ですね。二人とも被曝して亡くなったんですね。これが東京電力が日本国民に伝えようとしていた「原子力の歴史」で、これをまず読みたいと思います。

「原子力の歴史、レントゲンが放射線の一つである^{エックス}X線を発見した1895年が原子力の歴史の始まりだ。翌年、キュリー夫人はその放射線が原子の中から飛び出してくるということを見つけ、1905年にはアインシュタインは原子が核分裂する時にエネルギーが出るという重要な予言をした。この予言が正しいことが証明されると、1942年にセルビアが世界初の原子炉を作って、ウラン原子を核分裂させることに成功した。こうした成果をもとにして研究がすすめられた結果、今では世界31か国で原子力による電気が作られている。」

見事だと思うんですね。こんなふうには原子力の歴史を語ることができるんだと。ぼくはあ然として、詩人として羨ましいなと思ったり、こういう技術を持っている人と闘わなければいけないなと思ってしまいますね。



原子力の本当の歴史

アインシュタインは $E = Mc^2$ と出しますね。Eはエネルギー、Mは物質の質量、Cは光の速度、光の速度の二乗です。核ウランが核分裂して、割れて他の物質に化した時に質量が減るんですね。核分裂する前の原子の重みと、割れた後の放射性物質の重みと計ってみると差が出る。

つまりどこかにいった物質が何になっ

たかというエネルギーに変わる、つまり爆風とか熱線とか熱に代わる。そのエネルギーがどのくらい変わるかというと、減った質量×光の速度²、つまり1からでもすさまじいエネルギーになるということですね。1グラム減っただけで、とんでもないエネルギーになることをアインシュタインは当時は証明できなかったんですが、予言しちゃったんですね。ほぼそのとおりだった。

核分裂の時にすさまじいエネルギーが出ることはわかっていた。それをふまえて爆弾を作ったらすごいとプロジェクトが立ち上がった時に、いろんな物理学者が巻き込まれて、巨大な秘密プロジェクトに吸い込まれ、核分裂のウランやプルトニウムの研究をやって爆弾を作った。それが核開発の歴史、つまり原子力の歴史なんですね。

「1942年にセルビアが世界初の原子力を作って、ウラン分子を核分裂させることに成功した。こうした成果をもとにして研究がすすめられた結果、いまでは世界31か国で、原子力による電気が作られているよ」、『未来のパスポート』ではこんな書き方ができるんですね。



原子炉と核兵器づくり

世界初の原子炉を作ってウラン原子を核分裂させることに成功したエンリコ・フェルミはイタリアで生まれで、アメリカに

渡ってマンハッタン・プロジェクトの中心人物の一人になりました。ウラン爆弾だけでは大量虐殺の世界支配がうまくいかないから、プルトニウム爆弾を作るためにはどうするか。現象を圧力釜の中でやり、その中で一気に爆発させるのではなく、じりじりとプルトニウムを作っていくという、それがマンハッタン・プロジェクトの核兵器開発のいちばん大きな課題だったのです。

原子炉はプルトニウムのためにできた装置です。プルトニウム作りが原子炉の本質であってそれは今も変わらない。プルトニウム爆弾に詰められて、一発目がアリゾナで爆発させたんです。もちろん住民には何も知らせない。砂漠のど真ん中で原爆が爆発したからびっくりして通報したんですね。米軍は“ご安心ください。火薬庫が爆発したんです。死者もけが人も出ていないから”というので、みんな外で洗濯物を干して死の灰を浴びているんです。日本は最初の被爆国といいますが嘘ですよ。最初の被爆国はアリゾナです。それがプルトニウム爆弾です。

東京電力という日本の企業はどう思っているか、もう一回見てみましょう。

「1942年にフェルミが世界初の原子炉を作り、ウラン原子を核分裂させることに成功した」。

素晴らしい。エンリコ・フェルミがや

ってくれた成果をもとに研究が進められた結果、いまでは世界31か国で原子力による電気が作られているよ。プルトニウム爆弾がどんどん作られ、水爆が作られ、核保有国がどんどん増えて、核実験が2000回以上繰り返され、地球上のすべての生き物が被曝して、みんなの健康が害されて、平和利用の名のもとに世界31か国が核兵器を手に入れながら、原発をやっているんだ、ということが本当の意味です。

でもこうまとめられるのは広告代理店の技術です。広告代理店の仕事とぼくみたいな詩人がやろうとしている仕事と何が違うか。『未来のパスポート』を読むと感心してしまうんですね。広告代理店のコピーライターと同じ原稿と同じ道具で同じ人々に言葉を手渡そうとするんです。

道具が違うけど、どこが一緒かという、詩人は何かを発見してみんなに見えてないものに気付いて、その小さな発見を言葉に表現して読者に手渡そうとする。みんなと発見を共有しようとして言葉にするんです。

広告代理店のコピーライターたちは、みんなにいらぬものを買わせるのが広告、発見を共有しようとするのが詩人、その違いですね。いらぬものってこの世の中にいっぱいあるんですね。いらぬものはコマーシャルで売ります。

核兵器はいらぬ

ではこの世の中で一番いらぬものは何かというと核兵器です。核兵器の恩恵は一つもないんです。金をいっぱいまきあげられ被曝させられて、核の冬という最悪の結末と隣り合わせで暮らさなければならなくて、おまけに民主主義と憲法が核兵器開発の力でつぶされて、声を上げる権利も奪われて、全部秘密主義に包まれているから、情報も全部奪われてしまうんです。

核兵器ほどいらぬものはないんです。だけどアメリカ合衆国が核兵器を作ってしまった。マンハッタン・プロジェクトはアメリカ合衆国がアメリカ帝国になり下がる道なんです。マンハッタン・プロジェクトによってアメリカの憲法が殺されて、核兵器を作って世界を支配するようになったのがアメリカ帝国の流れなんです。

その流れの本質を捉えるためには、広告代理店のコピーを見ていただければわかります。最初はヒロシマ・ナガサキですよ。全部国家秘密ですから、アメリカ国民の富を誰も想像できない額を使い込んで作ったんですよ。それだけの使い込み大プロジェクトが途中でバレたらたいへんなことになるんです。トルーマン大統領が逮捕されるかもしれない。

ロッキードなんてもんじゃありません。20世紀最大の不祥事、憲法違反だから、陸軍や政

権の中枢にいる人たちも、大統領も含めて刑務所に入るかもしれないプロジェクトです。やっている本人たちも必死ですよ。おっかなびっくりです。

45年に入ってやっと形になってきて、いつ使おうか、プルトニウム爆弾は複雑だから、実験をやってから落とさないといけな、いつどこで実験をするかと話をしている時にドイツが降伏してしまう。残っているのは日本だけでしょう。

最初から日本に落とすという計画だったと思うが、日本がもし戦争をやめたと言ったらどうする。もし原爆を落とさずに第二次世界大戦が終わったら大変なことになる。アメリカ国民に計画がばれてしまうでしょう。落としてから広告代理店の技術を使って大々的にPRすれば逃げられるかもしれない。莫大な違法な予算を永続的に組めるかもしれない。ヒロシマにまず落として、大急ぎでナガサキに落として、原爆投下と同時に原爆売り込み大作戦が始まる。そうしないと大変なことになるから、誰もとれない責任だから。



誰も核の責任がとれない

核開発の最大の特徴は何かというと、誰も責任が取れない物質を扱っているんですよ。いまの原発事故も東京電力の責任問題、或いは経済産業省の責任問題、誰が責

任をとるか。原発事故も核兵器の実験も原爆の投下も誰も責任をとれない。だって扱っている物質がウランが核分裂して爆発した場合、たくさん出てくるでしょう。

セシウム137は半減期は30年、ストロンチウム90も30年位の半減期ですよ。プルトニウムは一番中核にあり、半分に減るのが24,000年です。誰が24,000年後の責任を取れるんですか。取れないからやっているんです。それが最大の特徴です。



核の二大キャンペーン

最初のマンハッタン・プロジェクトの責任逃れや、原爆投下を正当化する8月6日、9日のPRキャンペーンが始まって、アメリカのすべてのマスコミが巻き込まれ、政府やすべてのあの手この手の力を使って、アトムはミラクルな新兵器だと売り込んだ。それでアメリカ国民の間では、アトムという言葉が大流行するんです。うちのじいちゃん、ばあちゃんもスゲーと言うんです。だから有名なバンドリーダーのカウントベイシーも、戦後に出したアルバムの表紙はきのご雲なんですよ。つまり、スゲー、カッコイイと売り込んで、同時に核開発を続けてガッポリ儲けて、世界を支配しなければいけないから、アトミックボーンの売り込みと同時に、ソ連に対する恐怖をおおるPRも行われたんですね。その2つの大き

なキャンペーンがずっと続けられたんです。

原爆によってみなさんの息子たちの命が救われて、アメリカが正義の味方として勝利した。原爆は素晴らしい。でもソ連も原爆を作ってしまった。その恐怖をあおって予算をぶんどって、核開発を続けプルトニウム爆弾を作ったんですね。トルーマン大統領は逃げ切って、アイゼンハワー大統領に替わったんですね。



アイゼンハワーと軍拡

アイゼンハワーは第二次世界大戦の陸軍のトップです。マンハッタン・プロジェクトは陸軍の管轄下です。アイゼンハワーはヨーロッパの陸軍のトップから天下って大統領になった。トルーマン政権下の1947年に憲法違反のCIAが作られ、国防総省が作られた。アイゼンハワーが大統領になって、就任の時は国防総省は核兵器をすでに1000発持っていた。水爆ではなくて原爆です。

水爆は1952年に作ったんです。1000発ってすごいでしょ。ほとんどプルトニウム爆弾です。アイゼンハワーは軍から天下った大統領ですから、辞めた時には2万2000発になっていました。人類の歴史の中でアイゼンハワー大統領ほどの軍拡競争をやった人はいない。歴史に名が残ると思います。

アイゼンハワー大統領が就任して、1952年に水爆実験をやって作ります。ソビエトはその前に原爆を作っていたから、ソビエトもあつという間に水爆を作ってしまう。

1953年に入ると一般のアメリカ国民がミラクルの兵器だと思っていたのが、悪魔の兵器なんだ、地球をだめにするものだと気付いて世論が変わったんです。それでアイゼンハワー政権が困って慌ててしまった。



核廃絶世論の動き

核廃絶のほうに流れる気配が出てきました。流れが変わるときは広告代理店が動きますよ。一番大きな広告代理店であるホワイトハウスが、アメリカ人がまた核兵器大好きと思うようなキャンペーンのキャッチコピーが課題だったんですね。

核兵器の売り込みはむずかしい。本当は日本はすでに戦争をやる能力はなかったから、戦争が終わるのは時間の問題だった。原爆を落としても落とさなくても変わらない。だけどアメリカ国民には日本の実態は伝わってなかったので、“日本は最後まで戦う覚悟だった”とPRすることができたんです。

1953年は冷戦に入っていますが、日本やドイツのような敵がいるわけではない。仮想敵として利用してきたソ連に対する恐怖をあおってずっと利用していたが、向こ

うも水爆を持ってしまって、恐怖をあおればあおるほど世論が核廃絶になる。“ソ連がやばいよ、だから核開発をやらなければ”というのは行き詰ってしまった。しかも核兵器は素晴らしいというペテンのPR作戦も化けの皮がはがれてしまった。



原子炉は発電機か

そこでどうするか。アメリカ国民が核廃絶を望んで選挙になると、軍の予算がどんどん減らされて企業も困るし、世界を核兵器で支配している一部の人たちが利益をむさぼるとするのが核兵器のうまみだから、彼らにとっては絶対手放したくない道具なんです。一般国民にとっては何のメリットもなく、金を巻き上げられ被曝させられるという、1%未満の権力の座にいる人たちと99%以上の国民のギャップがあったんですね。

核兵器を望んでいる人たちがホワイトハウスやペンタゴンにウジャウジャいて、核兵器の実態が少し見えてしまった国民に、もう一回売り込んでいく作戦をひっかけるためのフックがない。

そこで広告代理店の奥の手でやるしかないのです。どうするかというと、新発売、新商品のでっち上げです。核兵器を売り込むのはムリ、水爆はすばらしいよとフランクシナトラに歌わせても受けない。新商品

にして、でっちあげでもいい、夢の商品にして売り込むんです。その時、アイゼンハワー政権のホワイトハウスに集まった優秀な広告代理店の連中が何を考えたかという原子炉です。プルトニウムをつくる装置です。

プルトニウムを作る時にウランの核分裂をやると想像を絶する熱が出ます。その熱を取らないと原子炉が融けてしまう。福島第一、第二はそうですね。でも原子炉は熱がでるから冷やすために何を使えばいいかということと水ですね。冷やしながらプルトニウムを作る。熱を取る時に水が沸騰して蒸気が出るんです。

出た蒸気を管で送って汽車を走らせるということはできるんです。或いは蒸気をどこかに送ってタービンを回し電力を起こすこともできる。蒸気が出ればいろんなことができる。スチームエンジンは昔からある。でも電力のためにこんな核分裂を圧力釜の中でやることはできない。ほかに石炭もあるし石油もあるし、熱源はいっぱいあるんです。だから湯沸かし器として原子炉を使う人はいない。

原子炉はプルトニウムのための機械です。昔もこれからも死の灰を作るための装置なんです。でも熱は出る。熱が出たら蒸気が出る。蒸気が出たら発電することもできる。“原子炉は発電機なんだよ”と言って、

みんなの生活とうまくつなげていく。だってみんな電気を使っているでしょう。1953年からですから、一般の洗濯機はまだ手で回していた家が多かったかもしれないけど、アメリカでは50年代に入ると、普通の家でも電気洗濯機です。冷蔵庫はでっかいのがある。電気代は結構バカにならないんですよ。



「平和利用」の新キャンペーン

それでどのように売り込むかということ、“原子力は無限のエネルギーのもとです。だからこれを使って電気を作ります。そうするとみなさんの電気代はタダになりますよ”という約束です。アメリカ政府の公式の約束が、電気代はゆくゆくはただになりますという“安すぎて^{はか}量れない電力”というのが売り文句です。それだけではなく、アイゼンハワー政権が打ち出した一番のPRのキャッチコピーは、「平和のための原子」です。これがどういう場で発表されたかということ、国連総会です。

1953年の12月8日、ニューヨークで国連総会があり、アメリカ国民の核廃絶世論の流れを心配して、核兵器を売り込むためには、違う作戦が必要だと考えて練った世紀のペテンPR作戦です。それを国連の演説のタイトルにして、アイゼンハワー大統領が世界に発信したんですね。その時の

演説も見事でした。

聖書の言葉をいっぱい引用して、“人々が戦争の道具として使っていた刀を加治屋さんが叩き直して、土を耕して、命を育むためのクワやすきに作り替えた”という話があるんですね。それをアイゼンハワーが核を売り込むための宣伝文句にして、“いままで兵器として原爆のもととして使っていた原子の力、核の力を、これから世界中の人々の幸福のために、みんなの平和のために無限のエネルギーとして使います。これからは電力はただになるし、戦争はなくなるだろう、平和のための原子なんだ”という見事な演説で売り込んだんです。

国連の演説だけでPR作戦がうまくいくはずはないから、政府があらゆるマスコミに売り込んで、アメリカ郵政省が記念切手を出し、子どもたちをだます世界のプロのウォルトディズニーに頼んで、原子力を売り込むフィルムをつくらせました。

こうして、世界で一番大きな広告代理店であるホワイトハウスの下請けをやっている永田町にも仕事が下りてきて、日本語版の「原子力の平和利用」という言葉がでっちあげられたんですね。それが1953年の暮れです。それから中曽根康弘、正力松太郎たちが平和利用の原子力予算を作り始めるんですね。だって平和利用をやることで原爆は手に入るからね。核兵器がほしい人

はもちろん「平和利用」をやります。

平和利用のPR作戦が始まって、アイゼンハワー大統領の国連演説の2か月後に、ビキニ環礁でヒロシマ原爆の1000倍の爆発力を持つ水爆実験をやり、あと続けて4発も行った。大統領の舌の根も乾かぬうちに、平和利用をやりながら、戦争利用もやりまよということです。軍事利用と平和利用を一緒にやっていくのは、平和利用がペテンにきまっています。

日本が最初の原発予算を組んだのは、1954年です。その年は第五福竜丸事件ですね。彼らは2週間かけて焼津に戻ったんです。爆発を見た瞬間に無線長の久保山愛吉さんが、核だということをしぐ察知して、しかもは軍事機密にふれてしまったから殺されるに違いないと判断しました。どうやって彼らは焼津に戻ったかというと、久保山さんが他の22人の乗組員に、飛行機か船が見えたらすぐに焼津に無線を打って危険を知らせるから、という指示をしました。

ペンタゴンというアメリカの国防総省は、アメリカの最大の軍事機密に触れた者を何の躊躇もなく消します。生きて焼津に返すようなことは絶対にしない、だから見つかったら終わり、久保山さんはそう察知しました。しかも無線を傍受されると、生きて帰れないかもしれないと、焼津への進路を変えるんです。

吹雪のように死の灰が降ってくる。彼らはその死の灰を浴びているだけでなく、空き瓶にサンプルを取り大事に保管して、下痢と吐き気、髪の毛は抜けてくる、おできはできてくる、顔は黒ずんでくるけど、一切助けを求めることもなく、2週間じっと耐えて焼津に戻り、港のセリの時間が終わるのを外海で待って、それからそっと船主のところに帰ってきました。そして死の灰のサンプルを持って上京したんです。



母親運動の始まりと平和運動の岐路

当時日本には御用学者じゃない人もいたんですね。その学者たちが調べて、これは水爆だということが知られて、それから母親運動が始まります。それが杉並の署名運動の出発点です。彼らが生き証人になって語ったことが世界の市民に伝わっていた頃に、それを迎え撃つように、原発の平和利用のPRが始まったんです。

しかし、第五福竜丸の事件から始まった、核と手を切る運動、母親大会の運動を含めた大きな流れが、平和利用のペテンの流れに切り崩されたんです。平和利用は核廃絶、核と手を切る運動をつぶすための手段だったんですね。それが1954年の岐路です。

平和利用をやったのは誰か。米国政府、日本政府、読売新聞ですよ。でも第五福竜丸のスcoopは読売新聞です。1954年3

月16日の朝刊に載ったんです。それで世界に伝わった。読売新聞の長い歴史の中で唯一、意味のあるスクープなんですよ。

原水爆禁止運動の中には、“原発はいいけど、原爆はだめ、核兵器はいけないけど、核燃料はいい”としたんです。それにひっかかったんですよ。日米政府はヒロシマを狙い撃ちしたんです。

1955年、原爆投下から10年たって、原爆資料館がオープンするんです。いまある平和資料館、その1周年の記念企画として何をやったかという、原子力の平和利用博覧会です。原爆資料館にあった被爆した中学生の帽子、制服、弁当箱とかを全部公民館などに片づけて、原子炉や原子力船の模型、飛行機・原子力ミラクルのエネルギーの模型などずっと並べて、広島の子どもたちに見せたんです。

広島の人々が狙い撃ちにされて、あなたたちを苦しめた原爆は、これから世界平和を作り上げる力になりますよ、みなさん協力してください、素晴らしいでしょうと売り込まれたんです。

ヒロシマの人たちが引っかければ世界が引かかる。ヒロシマを落とせば日本中の人々が引かかるんだという作戦だったんですよ。その作戦はかなりうまくいったんですよ。アメリカ国民もフランス国民も平和利用に引っかけたままの人はいらんです

が、日本国民ほど見事に引っかけた人はいらんです。世界中探してもいない。

平和利用という言葉が今も使われていることが不思議です。なんで今も政治家の口から出てくるのかわからない。それがぼくらが伝えようとして伝えられなかった市民運動の失敗の証だと思う。原爆と原発が別物だという思い違い、そこがカギですね。

核は軍事利用しか役に立たないので、軍事利用しか見えてないと、99%の人が原爆は嫌いだ、やめようということになる。それでは困るんです。軍事利用がいいか、平和利用がいいか、その選択肢を見る時、マックを思い出します。マックで食べたいものは一つもない。軍事利用がいいか、平和利用がいいかとは、ハンバーガーがいいかチーズバーガーがいいかということなんですよ。そこには選択肢はないんですね。



核廃絶という選択肢

ほんとは核廃絶という選択肢があるんです。核廃絶は核燃料とも核兵器とも手を切るとのことです。核燃料と手を切らないで核兵器をなくそうというペテンにひっかかった核廃絶運動はいつまでいっても手を切ることができない。核兵器と核燃料は何のの違いもない同じものです。

東京電力も認めています。『未来のパスポート』を見ると“炎がないのに燃え出す

原子力パワーの不思議”と書いています。炎のないものは燃料ではありません、核分裂性物質です。平和利用のペテンが始まったころから核燃料と呼ばれるようになったのです。エンリコベルリンという天才の物理学者は「核燃料」という言葉は口にしません。でも「燃料」にするとみんなをだますためにはいい道具です。

使用済み燃料が害を及ぼさなくなるのにどの位かかりますか？ 10万年間保管しなくてはいけないものが使用済み、何も済んでいないじゃないですか。それが平和利用という大きなペテンから出てきて、核廃絶をつぶす広告の力になったんですね。原子力と核、核燃料と核兵器、原爆と原発がほんとに別物だったら、“原発は嫌いだけど核兵器は好き”という人はいると思うんですよね。

“日本は核武装すべきだ”という無知蒙昧^{おうちもうまい}の輩^{やから}は、核兵器はみんな原発推進なんですよ。どうしてかというと、平和利用は軍事利用の隠れ蓑^{みの}に過ぎないんです。それをみんなに売り込むために原発を大きく見せかけて、原発を認めて核兵器を認めない人をいっぱい作っておく。そうすればいつまでたっても核はなくなる、核兵器の廃絶はできない、いつもぼくらが被曝の道を歩んでいかなければならないんです。

これから次のPR作戦が出てきます。広

告代理店の優秀なコピーライターたちはいま大忙し、どうやってこの危機を乗り越えていこうかと次の売り込みを考えています。



歴史の岐路に立っている

ぼくらがやらなければならないことは、もちろん平和利用のペテンの歴史を見抜いて、そのことを語る必要があるんだけど、同時に次に出てくるペテンを見通して、出てくる前に、あるいは出てきた瞬間に見抜いてつぶしていく必要があるんです。そうしないと、この1954年と同じような岐路に立っているぼくらの最後のチャンスを逃したら、次はめぐってこない気がします。そういう歴史の岐路に立っているような気がします。

話が長くなってすみません、ありがとうございました。

(まとめ・文責／竹森絹子)

アーサー・ビナード 1967年、米・ミシガン州生まれ。詩人、俳人、随筆家。妻は詩人の木坂涼。ニューヨーク州コルゲイト大学で英米文学を学び、1990年来日、日本語で詩作を始める。2001年詩集『釣り上げては』で中原中也賞、2008年詩集『左右の安全』で山本健吉文学賞を受賞。文化放送のコメントーターとしても活躍。憲法、平和、原発についての講演活動も行っている。

主な著書は詩集の他に、絵本『ここが家だベンシャーンの第五福竜丸』エッセイ『日本語ぽこりぽこり』『亜米利加にも負けず』他多数。